千葉県日独協会通信　No.12　－2000年（平成12年）1月15日

Die Eiche ディ・アイヘ

Japanisch-Deutsche Gesellschaft in der Präfektur Chiba

事務局 〒274-0822 船橋市飯山満町2-518-1 第二ワールド ナーシング ホーム内
TEL 047-461-9111　FAX 047-461-7010

－特別史料展－

「ドイツ兵の見たNARASHINO 習志野捕虜収容所 1915～1920」

主催：　習志野市教育委員会
協賛：　千葉県日独協会他

来る1月15日(土)～30日(日)迄上記展覧会が京成津田沼駅のザ・クレストホテル津田沼にて開催されます。80年前の写真・絵はがき等120点余が展示され同時にホテル側がドイツフェアを開催しますので皆様の見学をお待ちしております。(入場無料)

習志野捕虜オーケストラ
（ドイツ ボーフム市 ヴァルター・イエーキッシュ氏所蔵）

講演会とドイツワイン試飲会（23名）

去る11月21日(日)午後、JR津田沼駅近くの船橋市東部公民館に於いて、環境問題についての講演会（詳細下記）とドイツワインの試飲会が行われた。試飲の講師には、日本人で二人目のワインマイスターの和田浩行氏（中央区八丁掘「入船屋」3代目。朝日3/22産経4/2付で紹介）にお願いし、ラベルの見方、仏・伊ワインとの違いや産地毎の味の違い等を、ぶどうの摘み期の異なる8種のワインを味わいながら聞いた。又、つまみは会員の古倉夫妻、下川、鈴木、丸山さんらにチーズ、クラッカー、ジャガイモ、ソーセージを用意して頂き会は大いに盛り上がった。

講演する美浦氏、左上は和田氏

講演　「化学物質はなぜ地球を汚染したか」

会員 美浦 義明氏

最近のダイオキシンや環境ホルモン問題を契機として、化学物質による環境汚染がクローズアップされてきた。なぜ、化学物質が地球を汚染するようになったのかを考える。

まず、十五世紀以降の科学革命、宗教改革、資本主義の成立を背景とする人間中心主義と自然征服思想が近代西欧思想の根底にある。二十世紀には二度の世界大戦と冷戦が契機となって技術革新が展開し、科学の技術化、技術の工業化・産業化が進行した。しかしその一方で科学の成果（技術）を適用する際に事前の評価（アセスメント）が不十分な例が増加してきた。特に二十世紀に入ってからのエネルギー・資源革命も大きな要因であった。石炭から石油、天然ガス、さらに原子力の出現である。

以上の要因があいまって、大量生産、大量消費、大量廃棄社会が出現した。その結果、次のような深刻な環境問題に当面することになった。

・石炭、石油などの燃焼による地球温暖化や酸性雨の問題
・化石燃料や廃棄物などの燃焼によるダイオキシン問題
・原子力発電にともなう放射能や放射性廃棄物問題
・喫煙公害の問題

また酸、アルカリなしには現代の化学工業は成立しない。二十世紀中頃から、石油化学工業製品としてアルカリ製造の副産物である塩素の需要が急増した。その製品は農薬（DDT、BHCなど）、塩化ビニール、フロン類、PCBなど現代工業文明を支える重要な人工化学物質ばかりである。ところが、これら有機塩素系化合物のほとんどに有害性が認められ、あるいは疑われだしたのが現状である。また人工化学物質であるフロンが大気中に放出されオゾン層が破壊されている。

これまでのモノの生産、流通、消費に関する産業を、新しく廃棄、再生、再資源化、再生産につなげて「循環型の産業構造」に転換し、更に政治・経済の仕組みを変革して、大量生産・大量消費システムの改革の糸口をつかみ、それを突破口として循環と共生の社会システムを目指すべきである。そのキャスティング・ボードを握っているのはわれわれ生活者・消費者なのである。

今後の催物案内

■ 理事会
日時: 3月下旬予定
場所: 船橋市東部公民館
JR総武線 津田沼駅 北口下車 徒歩3分

■ 寅さん博物館・矢切の渡しを訪ねて（会員交流会）
日時: 4月16日(日) 10:45A.M.
集合: 京成 柴又駅改札口
費用: 2,000円(昼食代他含む・電車賃は各自負担)
申し込みは事務局まで 電話又はFaxで

■ ヴェストファーレン州立美術館展
「美の扉～ピカソ、マティスからステラ、ボイスまで～」
場所: 佐倉 川村記念美術館 (043-498-2131)
期間: 3月25日～ 6月4日（月、火曜は休館）
入場料: 1,200円(但しこのDie Eiche持参者は800円)
交通: JR又は 京成　佐倉駅より送迎バスあり

■ バンドスタンド 船橋2000
日時: 1月29日（土）5:00PM～
場所: 船橋市民文化ホール（船橋駅 南口6分）
入場料: 自由席2,500円（前売り2,000円 事務局迄）

平成11年度ドイツ軍人戦没者慰霊祭

ドイツ国民追悼の日（Volkstrauertag）である11月14日（日）、午前11時から船橋市営習志野霊園において千葉県日独協会主催のもとに、平成11年度第一次世界大戦ドイツ軍人戦没者追悼慰霊祭を行った。ここに祭られている30柱のドイツ軍人は、第一次世界大戦中に青島で日本の捕虜となり千葉県習志野の捕虜収容所に於いて当時流行したスペイン風邪などの為病没した人たちである。

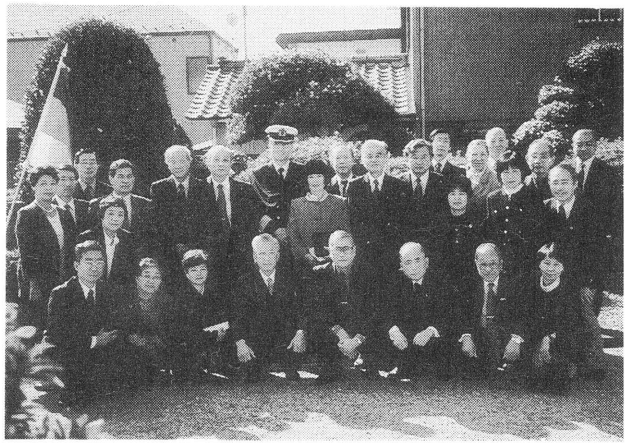
式は、林理事長の開会の挨拶に続き、9月に着任されたドイツ連邦共和国大使館国防武官ライムント・ヴァルナー海軍大佐から追悼の辞と慰霊墓参を続けている当協会に対する謝辞が述べられた。

その後加藤会長から慰霊の辞に続き、伝統的なドイツ軍人葬送歌「Ich hatt' einen Kameraden（よき仲間）」が献奏される中、会員を始め習志野市教育委員会や地元宗教団体ボランテイア団体等の献花があり、式を閉じた。

また、習志野市教育委員会から第一次世界大戦習志野捕虜収容所にまつわる写真が霊園の中央で展示され、米澤係長の説明により当時を偲ぶことができた。

その後、前任のトロップシューク空軍大佐の後任として当協会顧問に就任したヴァルナー海軍大佐を招き、幕張のグリーンタワーホテルにてささやかな歓迎会をおこなった。会には当協会名誉会員の臼井日出男法務大臣も公務多忙の中わざわざ参加され、大臣が元防衛庁長官であった事もあり、武官も大変感激、今後の日独の友好親善と交流の促進について大いに歓談、歓迎の実を上げる事が出来た。

前列右より加藤会長、臼井名誉会員、ヴァルナー大佐夫妻、林理事長



墓前にて、後列中央に国防武官ライムント・ヴァルナー海軍大佐夫妻

「海外旅行も三人よれば」

会員 水野春美

昨年十月初め女三人で、ドイツ、ベルギー、オランダへ出かけた。一年間、船橋教室で学んだドイツ語を試してみたいと思ったのである。先ず、ボン近郊に住むブラント夫妻の協力を得て、ホテルの予約と列車の切符の手配をして頂き、ドイツのリンツを振り出しにベルギーのブルージュ、ゲント、オランダのアムステルダム、そして又ドイツのケルンと地図でなぞると三角形に移動するルートを選んだ。

ブルージュ二泊、アムステルダム三泊、ボン近郊三泊。ブルージュは十二・三世紀西ヨーロッパ貿易の中心地として繁栄した街並みを今に残して、観光に生きる橋の多い水の都。滞在中、たまたま広場の市が立ちその賑わいを楽しみながら、昼食に備えての買い物。持ち前の主婦感覚で商品を日本のそれと比較して、その安さを羨み、珍しがり、スペアリブを焼く匂いに誘われて、土地の人々の群れに加わり焼肉の塊を買い込み、デリカショップの店員に勧められるままに求めた赤ワインも美味で安く、其の日の昼食はホテルの屋根裏部屋で寛いだ宴となった。

ブルージュからアムステルダムに向かう途中ゲントで下車して荷物をコインロッカーへ預けたが、ロッカーの使用法も日本と違い、トイレでは使用料を促されたり、僅かな事でも異国となれば面白く話題は尽きず姦しく動きまわった。聖フーバー寺院の「神秘の子羊」は日本語のイヤホーンも用意されていて無知な私も興味深く拝見する事が出来た。

日がとっぷり暮れてから着いたアムステルダムでは、駅で円をギルダーに替えるとタクシーでホテルに直行。二日間の市街電車乗り放題、コンセルトヘボーでのコンサート、ワイン付きナイトクルーズ、レンブラント、ゴッホ美術館のチケットも含めて七千円！ブルージュの救世軍大聖堂、アムステルダム宮殿など訪れて、ヨーロッパ社会が植民地から得た富の凄さに圧倒されて、複雑な思いのままゴッホ美術館を訪れると、じゃが芋のような農夫の絵が在って、この地で自らの力で生き抜いてきた農民や芸術家の存在を知り心が癒された一時でした。片言のドイツ語で語りかけ、ベルギーの言葉で返事されても、どうにか分かり合えるもので、列車での移動中も言葉の壁を越えて土地の人々との会話を楽しみました。ガイドブックで調べるのが得意な井田さん。お金換算は任せてと言う石川さん（会員）。ドイツ語試したがり屋の私。こんな三人の珍道中でした。